

**第3回京都市総合計画審議会
議事録**

日 時：令和6年12月10日（火）10:00～12:00

会 場：QUESTION7階 「Creative Commons」

出席者：

1 委員（五十音順、敬称略）

安保 千秋	弁護士
榊田 隆之	一般社団法人京都経済同友会代表幹事
阪部 すみと	Tsunagary オフィス合同会社最高執行責任者
杉田 真理子	一般社団法人 for Cities 共同代表/都市デザイナー
鈴鹿 可奈子	株式会社聖護院八ッ橋総本店専務取締役
曾我 謙悟	京都大学公共政策大学院院長
高屋 宏章	社会福祉法人京都市社会福祉協議会会長
田中 成美	市民公募委員
貫名 涼	京都大学地球環境学堂助教
濱崎 加奈子	公益財団法人有斐斎弘道館館長／ 京都府立大学農学食科学部准教授
原 敏之	日本労働組合総連合会京都府連合会会長
福富 昌城	花園大学社会福祉学部長
藤野 敦子	京都産業大学現代社会学部教授
プラー ポンキワラシン	市民公募委員
堀場 厚	京都商工会議所副会頭
牧 紀男	京都大学防災研究所教授
松井 道宣	一般社団法人京都府医師会会長
宗田 好史	関西国際大学国際コミュニケーション学部教授／ 京都府立大学名誉教授

2 特別委員

野村 将揮	ハーバード大学デザイン大学院／京都哲学研究所／ Yamauchi No.10 Family Office／京都大学成長戦略本部
-------	--

以上19名

1 開会

司会（都市経営戦略監）

ただ今から第3回京都市総合計画審議会を開催する。委員の皆様におかれては、大変お忙しい中、お集まりいただき感謝申し上げます。本日は、21名中19名の委員に御出席いただいている。審議会は公開とし、報道関係者席を設けるとともに、市民の皆様方にも傍聴いただいている。また、記録のために録音及び録画を行うが、御了承いただきたい。

堀場委員は、11月に就任いただき、本日からの御出席である。また、榊田委員、原委員におかれても、第2回審議会から御出席のため、御紹介ができていなかった。この場にて一言ずつ自己紹介をお願いしたい。

堀場委員

堀場製作所の会長を務めているが、この審議会には商工会議所の副会頭という立場で参加させていただいている。こういった審議会は非常に重要だと思う。私は京都生まれ、京都市育ちだが、今年も11回の海外出張をして、ヨーロッパ、アジア等の様々なまちを見ていると、やはり京都は本当に風情があって何とも言えない魅力があると感じる。しかし、長く京都に住んでいるとその魅力が分からない。だから、この何とも言えない魅力をどう引き継いでいくかということは、日本にとっても非常に大切だと思う。大上段に振りかぶったように聞こえるかもしれないが、そういう思いでこの会に参加させていただくので、どうぞよろしくお願いする。

榊田委員

本日は、一般社団法人京都経済同友会の代表幹事という立場で出席させていただいているが、普段はコミュニティ・バンク京信、京都信用金庫理事長を務めており、このQUESTIONの管理をしている。本日は、ようこそQUESTIONへお集まりいただいた。

QUESTIONは、地域の人々が持つ問いや課題といったものに対して、みんなで解決策を考えるための交流拠点として創設した場所であり、本日こういう審議会が、松井市長の御参加の下で開かれることを大変嬉しく思っている。微力だが、一生懸命参加したいと思うので、どうぞよろしくお願いする。

原委員

日本労働組合総連合会京都府連合会、いわゆる連合京都の会長を務めている。生まれは滋賀県長浜市だが、京都市に40年余り住んでおり、労働組合、いわゆる働く者の代表というよりは、一京都市民としての位置付けで意見を提供していきたいと思うので、よろしくお願いしたい。

司会（都市経営戦略監）

さて、本日の第3回審議会からは、長期ビジョンの草案について御審議いた

だく。本日と次回の第4回審議会で骨子案について御審議いただき、第5回審議会で長期ビジョンの全体像をお示しする予定である。

本日は、主に長期ビジョンの構成に関して御審議いただき、第4回審議会以降において、第2回までに頂いていた御意見や市民意見なども踏まえながら、さらに議論を深めていきたい。それでは、審議に当たり改めて市長から一言御挨拶申し上げます。

松井市長

御多忙の中、本市の総合計画審議会に出席いただき、心から感謝申し上げます。前回の第2回審議会は、私が会長を仰せつかっている世界歴史都市会議の日程と重複していたため、やむを得ず出席できなかった。御容赦いただきたい。私は、委員の皆様に御審議をお願いしている立場であるので、あまり口を挟まず忌憚なく御議論いただきたいと考えているが、交通整理の意味合いで最初に一点だけ発言させていただきたい。

先週、新京都戦略の骨子を発表した。新京都戦略は、本年2月に市長の職を仰せつかった私の残任期であるこの先3年3か月の間に、どのようなまちづくりを行っていくのかということをお示しするものである。この度、その骨子を発表しパブリック・コメントを実施しているところであり、今後、京都市会でも御議論いただくことになる。

新京都戦略は、この総合計画審議会でも御審議いただく長期ビジョンと軌を一にするものでなければならぬものと考えているが、長期ビジョンの議論はまさに今、仕掛かりの段階であるから、これまでの御議論を踏まえた方向性を、私なりに市役所の部室長以下、各役職者、あるいは市役所の若手職員までを含めて伝え、意見を交わしながら戦略の骨子を作成した。まだまだ議論が必要だが、個別具体の政策課題はそちらに盛り込んでいくつもりだ。

具体の政策課題については、新京都戦略だけではなく、年度ごとの予算などで具体的に事業提案して、市会において御議論いただかなければならぬものだが、私としては、少なくともこの先3年3か月の議論の方向性をしっかりと盛り込んだつもりだ。この新京都戦略の発射角を定めるという意味合いでは、審議会委員の皆様の御議論を大いに参考にさせていただいているが、この長期ビジョンの議論は、3年3か月というスパンをはるかに超えた長期にわたる京都のまちの在り方を御議論いただくもので、時代に左右されない京都のまちの基軸を定めるためのものと御理解いただきたい。

とはいえ、具体的・網羅的に個別政策を書き込む新京都戦略やそれに基づいた個々の予算は、この長期ビジョンを踏まえて具体化していかなければならぬものであり、長期ビジョンを策定した暁には、それを踏まえて、新京都戦略もアップデートしていかなければならぬ。長期ビジョンと新京都戦略がどういう関係にあるのかと思われている方もいらっしゃるかと思ったので、この機会に御説明させていただいた。

今後、審議会の皆様に長期的な視点に立った骨太の長期ビジョンをしっかりと

と御議論いただき、我々はその議論を踏まえて、政策や組織の在り方を考えていきたい。何卒よろしくお願いする。私自身、この議論を非常に楽しみにしており、可能な限り毎回参加させていただきたいが、出張などがあった場合は出席が叶わないこともあるかと思う。しかし、節目には必ず参加したい。本日は、どうぞよろしくお願いする。

2 議事

(1) 長期ビジョン（仮称）の骨子（案）に係る審議

司会（都市経営戦略監）

それでは、ここからの進行については、宗田会長にお願いする。

宗田会長

本日の第3回審議会からは、前回審議した策定方針に基づき、長期ビジョンの草案作成に係る議論を行っていく。お手元には、長期ビジョン骨子案をお配りしているが、まずは、これを作成された野村特別委員に作成に当たったの考え方などの御説明を伺ってから、委員の皆さまの御意見を承りたい。

野村特別委員

お手元にあるA3用紙3枚で骨子案をお示ししている。こちらは京都市役所の皆様や特別顧問の皆様などとの議論も踏まえて作成した。先ほど市長からもお話があったように、今後25年間、2050年までを見据えた長期ビジョンであるため、幾分も概念的・抽象的なものとなっているが、今日は構成と概要を御提案したい。

御説明する時間も限られているので、差し支えなければ皆さま各人でこれから5分程度黙読いただき、その上で、私から改めて要点を御説明したい。それでは、5分程度、黙読の時間を取りたいと思うので、よろしくお願いする。

— 長期ビジョン骨子案を黙読 —

野村特別委員

では、御説明差し上げる。1 ページ目の青囲いの3つ目の白ポツ、文字数目安のところから。今、皆様のお手元にある、前回1999年策定の京都市基本構想、これより分量を気持ち少なめにと事務局の方から御依頼いただき、ここに記載した程度の分量を想定している。

続いて4ポツ目。元々京都市の都市理念として1978年に策定されている世界文化自由都市宣言の理念を、今回の長期ビジョンにおいても踏襲し、2050年を見据えてこれを踏まえた内容で作成していくことを念頭に置いている。記載のとおり、特にグローバル化とデジタル化の波が当時及び前回の構想策定時と大きく変わった時流なので、これらを踏まえて、京都市の持つ

文化・伝統等の力、役割も踏まえて、世界、国際社会との関係も念頭に起草していく想定でいる。

ちなみに、世界文化自由都市宣言は、お手元の基本構想をおめくりいただいた見開きの最初、右側のページの右上部分に世界文化自由都市宣言という囲いに記載があるので、適宜御参照いただきたい。この部分の下に、以降の基本構想などの関係も明示されている。この自由都市宣言の第一文に記載があるのが、「都市は理想を必要とする」ということである。ここは、骨子案に記載のとおり、第一章第一節以降と対応している。

世界文化自由都市宣言に記載されている「世界の現状の正しい認識」と「自己の伝統の深い省察」を、骨子案においてはそれぞれ時系列に沿って、第三章と第二章の順番で置いた。また、これを引き受ける形で、市民の努力及び世界史への貢献を最後の第四章として構成してはどうかと考えた次第である。

なお、いま申し上げた点は、骨子の各ページの赤囲いにも記載しているので、適宜御参照いただきたい。

1 ページ目については記載のとおり。次の2 ページ目、第三章について。赤囲いに記載のとおり、「世界の現状の正しい認識」と対応する第一節で、世界が過去25年でどう変動してきたか、そして、続く第二節では、京都市が世界のこれらの変化を引き受けながらどう変化してきたかということに記載する想定でいる。1点、非常に重要な点として申し上げたいのが、第一節の小見出しの最後のところである。「ESG/SDGs等の成果と限界、100字」と記載している。私自身、京都で生まれて、東京の大学を卒業し、経済産業省で働き、大学院で京都に戻り、今はアメリカと京都を拠点に研究している。この中で、日本や世界の様々な動きを体感してきた。やはり強く感じるのは、世界的にルールを決める規範の偏りではある。例えば、サステナビリティという概念があるが、この概念に基づいてESG等々の規範が国際会議、国際機関で提唱され、条約やこれに関連する国際租税等で制度として担保されてきた経緯が過去数十年顕著だった中で、いわゆる京都的ないし日本的な視座や文化交流が、これらの規範や制度に対して新しい概念的枠組みを提供し得るのではないかと個人的に強く感じている。すなわち、当該部分に記載する想定の内容を単純化して説明すると、二元論的ないし要素還元主義的な規範に対して、非二元論的ないし非要素還元主義的な視座を提供することが、いわゆる京都的及び日本的なものを通して人類社会に貢献する一つの道筋だろうと強く感じているところである。

サステナビリティという概念を例にもう少し具体的に御説明したい。サステイン(sustain)という動詞概念は、自然を人間から切り離して客体化している。いわゆるデカルトや、遡ればプラトンからの、二元論的に客体化・対象化するような規範を前提としている。また、例えばダイバーシティなど、ちなみに、私は、サステナビリティもダイバーシティも、思想としてはもちろん賛成であり人類として取り組んでいくべき課題だと感じてはいるが、ヨーロッパ的な個人主義が根底でかなり色濃く反映されている。すなわち、個人なるものが

絶対的に独立した枠組みとして存立しているということを強く前提している。いわばこれは、京都が育んできた禅的思想の縁起や空といった思想とは大きなギャップがあると思われる。この京都的、日本的な視座によって、今まで議論されてきたグローバルアジェンダ（人類社会の課題）設定の根幹にある価値規範、概念的な前提のようなものを問い直すような価値提供ができるのではないかと考えている。

続く3ページ目が、いま申し上げたような、いわゆる非二元論的ないし非要素還元主義的なものを、第一節から第三節まで、ある種具体化して記載を試みたものだ。

第四章第一節は、いま申し上げたサステナビリティとの関係で、自然そのものを開発や維持、消費等の対象とし、客体化する、つまり、人間と自然が別物であるというように前提として切り分けるような思想規範に対して、大袈裟に言えば、人間そのものが自然の一部であり、自然の中で生きていますと捉えるような思想が京都市に伝統的に根付いてきたということを提起しながら、その可能性を世界にも提示していくことを記載してはどうかと考えている。この際、決して自然との関係を、山に行って植林するといった類の話に限定することなく、あらゆる文化様式、生活様式、例えば我々の服装も食文化に至るまでが、みな人間と自然の関係を体現しているという立場に立って言及していつてはどうかと考えている。

続いて第二節。議論が複雑化するので単純化したい。時系列、すなわち現在なる時間が過去ないし未来とは絶対的に独立しているといった価値観がヨーロッパで主流だった時代は確かにある。他方で、京都市の時間との向き合い方を考えてみると、現在を生きる私たちが、実は、過去との連綿性の中に生きており、この意味において、私たちは過去を引き受けて過去を生きており、また、私たちのこの現在はずぐに過去になるし、あるいは未来と思われていたものが現在になるということにおいて、過去と現在と未来のある種の不可分性、大袈裟に申し上げれば一体性のようなものを見出し得るだろう。このような時間の感覚を書き込んでいくことで、「1200年の歴史」といった数値以上のものを醸出できるのではないかと思い記載している。

余談になるが、今朝、市内の大学病院に午後の検査の予約を取りに行ったところ、「野村さんは過去にもここに来られたことがある」と言われた。私はその大学病院は初めてだと思っていたが、「平成5年に受診されている」という。聞いたことのない市内の電話番号が登録されていたのだが、氏名も生年月日も一致している。おそらく、母が私を連れていった当時の電話番号が残っていたらしい。まさに過去に生かされているように思われ、大変感慨深かった。

総論として、過去と現在と未来が連綿として続いており、その中に自分自身、ひいては自分たちの共同体や、ある種の思想なり、文化なり、それらの蓄積を位置付けながら、自分が生きて死んでいくことを肯定していくというのは、京都市の未来に向けた議論として適切であると感じている。

ここまでの議論を踏まえて、この第二節の最後の一文にあえてぼやっとした

書き方をしている。「文化圏を問わず、人間性に回帰していく」。すなわち、デジタル化が進んでいくと、アテンション・エコノミーが進行し続けていく。アテンション・エコノミーとは、御存じの方も大勢いらっしゃると思うが、購買や消費を促すために、数秒で人間の注意を引き付けるような広告やコンテンツが氾濫している経済潮流のことである。即時的な人間の反射に訴えかけながらドーパミンを出させて、射幸心を煽るなり何なりする、というのが今日のデジタルマーケティングの主流になっている。しかしながら、本来的には、人生は、今は100年時代と言われているが、数十年スパンで生き方や在り方を考え続けていくものであり、このような人間的な時間感覚がアテンション・エコノミーによって奪われ続けていくだろう。この文脈において、人間的遺産の蓄積を人類社会に提示できる都市としての京都市の価値は、これからますます上がっていくだろうと信じている。

第三節。先ほども少し触れたが、ダイバーシティという言葉が特出して議論されることは、実はなかなか不幸なことであるようにも感じている。もちろん、個別にネガティブな考えを持っているわけでは全くないのだが、本来的に、自分が独立して存立しているのではなく、他者や共同体との関係性の中で存立しているという考え方があり得るはず。他者も、共同体も、自分も、当然に、過去、歴史、未来、ひいては自然に至るまでとの関係性において存立している。大袈裟に言えば、従来世界的に支配的であった個人主義的傾向にあえて対置されるような、いわば、ゆるやかな個人感を提示しながら、この延長線上に国際社会への貢献が示せばいいと考えている。

最後に第四節に軽く言及すると、上記3点を念頭に置きつつ、市長が予てよりお話されている「新しい公共」に私も大いに賛同しているところ、さまざまな次元で地域社会ひいてはまち全体をつくっていかうという主体性が公共にあったことが京都の特殊性であり、すばらしい性質だとも感じている。

第一節から第三節まで申し述べてきたような事柄を体現している京都市で生きる、生活できることの幸福を噛みしめながら、当然に、地球、ひいては人類社会の貢献可能性も見据え、その可能性を具現化していこうということで、「不断の努力を重ねていく」という強めの言葉で明記している。

私からの説明は以上である。

宗田会長

お聞きになったとおり、なかなか斬新な試みである。世界文化自由都市宣言は、都市は理想を持つべきであるというフランス文学、フランス哲学の理念を標榜された桑原武夫先生と、国際日本文化研究所を創られ、日本文化に大変詳しい方であった梅原猛先生のお二方によって起草された。そして、大阪大学学長を経て、禅哲学者である鈴木大拙先生が教鞭を執っておられた大谷大学でも教えておられた鷺田清一先生が起草されたのが現在の京都市基本構想である。

本日から進めていくのは、それらを踏まえたうえで、次の25年間でどうす

るかという、まさしく高邁な議論である。先ほど堀場委員からもお話があったように、過去、四半世紀にわたって京都はそれなりに努力をして今の形になった。そこから今後、世界にどう貢献していくかという議論を、委員の皆さん方と共に深めてまいりたい。

それでは、説明を踏まえて骨子案についての議論を開始したい。まずは榊田委員いかがか。

榊田委員

構成については理解した。特に第四章第三節、第四節のまとめ方が重要である。どれだけデジタル化が進展しようとも、人間中心であり続けること、すなわち人と人との関係性をいかに充実させていくのかということ。そして、多様性を伴うような社会構造の変化。つまり、多様な人々が、居心地がいいと思えるようなまちをどうやってつくっていくのかということだ。そういったことを実現したうえで、自分たちのまちは自分たちが一番責任を負っているのだという自治の概念をもう少し強く盛り込んでいただきたい。

そして、ステークホルダーとしての行政、市民、そしてまちの個性になる企業。それぞれ立場が違う構成員がきちんと連携する、距離を縮めるという関係性が、長期ビジョンの中に現れると良い。

全体的には、文体が難解なので、市民が読みやすい文章にすべきだと思う。

宗田会長

新しい公共ということを、松井市長が標榜されているが、コミュニティの在り方を、もう少し議論を深めたいということと、御自身が経済同友会の代表でもあり、経済界もコミュニティの重要な一員として、市民と共に新しい公共をどうつくっていくかという議論をもう少し深めたいということかと思う。そして、そのためには分かりやすい表現を工夫する必要があるというようなお話であった。まさに冒頭にふさわしい御意見を賜った。

続いて、堀場委員いかがか。

堀場委員

サステナビリティやSDGsなどを今更外国から言われたくないというのが私の考えの根底にある。京都、日本は、そうしたことを大上段に振りかぶらないで、自然にやってきている。

しかし、日本の弱さというべきか、外国から何か横文字で言われると、それを皆が真面目に一生懸命やるわけだ。「そのようなものは既にやっている」、「京都を見ていただきたい」というアプローチが大切で、そこには誇りがあると思う。海外の文化を否定しているわけでも、敵対する趣旨でもない。よく理解することが大切で、盲目的になるべきではないということが、私が強調するスピリットである。事実、事業をしても、そのスピリットに海外の人が惚れてくれる。やはり信念を持つ、動じない、文化的自信を持っていると

ということが基軸となっていることが重要であり、それがこの骨子案では論理的に展開されていると思う。野村特別委員のベースに京都人としての誇りがあることは、最も重要なことだ。

文体については、榊田委員と近い意見である。我々もブランドブックなどを作るが、誰も読まない。読まれるのは口語体で分かりやすく書かれたものだ。本日お集まりの委員の皆様方は、関心がおありだろうし多少難しくてもお読みになると思う。しかし、一般市民に対しては口語調の分かりやすいものにするのが良いのではないか。京都人のプライドというものが、ここからどのように出てくるかということが全てだと思う。

宗田会長

世界文化自由都市宣言にも矜持、誇りということが出ているが、それを、ただ内向きに持っているだけでは駄目だということ。世界の人と交流する中で、独自の誇りを世界に発信していくための努力が肝要ということかと思う。

堀場委員

一言加えたい。現在、関西経済連合会（関経連）の副会長をしているが、「京都は大阪を嫌っているだろう」と言われたことがある。私は心の中で「いや、嫌っているのではなくて、無視しているだけだ」とつぶやいたのだが、これは半分冗談、半分本当であったが、JRに乗れば僅か30分で行けるところの人たちが既に京都を誤解しているのだ。やはり我々は、もっと外に京都をアピールしなければならないのだと思う。

良い意味で外と馴染んでいく。外に対してアピールするということが重要であり、「京都市民は、京都は」とだけ言っていると、京都の中では良いが、特に日本の中で良くないと思う。むしろ、海外の人のほうが京都に対する誤解は少ない。

宗田会長

誇りが内向きであった背景には、町並みが汚かったり、京都が混乱したりという過去もあったと思うが、それがかなり改善されて、素直に、外部の人が京都はいいなと憧れてくれるようなまちになってきている。今度は、それをいかしたうえで、京都が新しい公共を含む、人類の在り方に関してどういう提言ができるかという議論に発展させていくための手掛かりになると思う。

続いて杉田委員、御発言いただけるか。

杉田委員

骨子の全体構成はとても分かりやすく、興味深く読ませていただいた。特に、私自身も、普段は都市デザイン、都市計画の仕事をしているが、西洋的な規範や概念をベースとした近代都市の限界を日々感じながら活動しているところもあるので、その辺りの議論を特に興味深く聞かせていただいた。

一つ私から付け加えたいと思ったところは、最後の京都市民のこれからという部分になると思う。私は、父が京都出身だが、私自身の生まれは京都ではなく、6年前に京都に引っ越してきた。それもあって市民の概念を、もう少し深く考えてみたいと考えている。

最近私の周りでも、例えば二拠点、もしくは多拠点という形で京都に関わりを持ち始める方や、海外から毎年京都を訪れる方もいらっしゃる。

従来の考え方では、住民票があり、市民権があり、投票権があるというところで市民が定義されるのかもしれないが、ライフスタイルが多様化した今、様々な形での市民の在り方、京都への関わり方があると思っている。その辺りもうまく、今回の骨子の中に含められると良いのではないかな。

宗田会長

世界の人々とどう交わるかという観点からの御意見であった。続いて鈴鹿委員いかがか。

鈴鹿委員

骨子案については、様々な要素が網羅されており、構成も分かりやすくよくまとまっているという印象を受けた。私から指摘しておきたいことは、「安心」や「安全」という要素が希薄であるという点である。現行の基本構想を見ると、「安心」がキーワードになっている。当たり前のことかもしれないが、世界情勢などが変化してきている中で、「京都にはつながりがあるから、安心」ということは一つのキーワードになるのではないだろうか。どこかに、そうした要素があると良い。第2回審議会のグループ討議では、町内会や地元の方と関わる理由が良くわからないという話題で議論したのだが、ネットのつながりの中で交流が済んでしまうようになって、やはり京都は顔と顔を合わせる地元の関わりが強く、町内会なども残っている。先ほど榊田委員がおっしゃっていた自治も根付いており、他都市に比べてそれによる安心というものがあるのではないかと感じたところである。

また、子育て世代の目線からの意見であるが、「子ども」についての要素が薄いと感じている。現行基本構想には「とりわけ子どもを安心して生み、育てられる環境づくり」として「全ての子どもたちが伸び伸びと健やかに成長できる環境づくりなど、子育てと子どもの自立に対する支援の仕組みが十分に整っていることは、まちづくりの重要な課題である」と記載されているが、やはり未来を見据えたときに、「子ども」に関する内容をどこかに盛り込むべきではないかと思う。

文化の面については、過去の歴史が新たな未来につながっていくという観点は興味深いと感じており、ぜひ盛り込んでいただきたいと思う。現行基本構想には、キーワードとして「市民の日常生活に深く浸透している文化」という言葉が用いられている。そうしたものがあからこそ、市民が持つ独特の美的感覚や暮らしの知恵などがある。先ほどの意見にもあった「京都の誇り」は、

個々が属している文化に誇りを持つことにもつながってくると思うので、それが日常にあることを、分かりやすい形で提示されたら良い。

最後に、既に指摘があったが、少し言葉が高尚すぎるような気がする。未来共創チーム会議委員の意見にもあったのだが、京都の文化や言葉は、実際より敷居が高いように感じやすく、敷居が高いと感じてしまうと「もういいか」となってしまう。現時点ではあらずじなので多少難しい表現なのかもしれないが、市民に浸透させるためには読み進めたいと思うような文体を心がけていただくと良いと思う。

宗田会長

安心と子ども、そして文化についての御指摘であった。特に文化については、過去と現在の一体性という観点から掘り下げていただいた。

安心の話が出たので続いては牧委員に発言をお願いしたいと思う。直近では南海トラフの注意情報が出された。それから、昨年が関東大震災発災100年、来年が阪神・淡路大震災発災30年である。そうしたことを踏まえて安心・安全をどう語るかということをお願いしたい。

牧委員

骨子は大変分かりやすくまとめていただいた。第二章第二節について、京都は天災には見舞われずにきたが、戦乱によって何度も焼かれ、立ち直ってきた。そこが京都の良いところだろう。防災の観点から述べると、被害を完全に防ぐことはできないので、被災後どう立ち直っていくのが重要である。よく「サステナビリティ」と併せて使われる「レジリエンス」という言葉があるが、レジリエンスが高いことが京都の強みだと思っている。それから、第三章第一節について、先ほど宗田会長からもあったように、来年で阪神・淡路大震災から30年になるが、この間で自然災害が大幅に増加している。それに対して京都がどう対応してきたのかというのが第三章第二節に書かれているのだと理解している。

第四章について、この文章の主語は「私たち京都市民」になるので、例えば、「コミュニティは」あるいは「自治会は」「社会は」ではなく、全て「私」が主体になるということは、災害から復興するにしても、安全・安心を確保するにしても、誰かがやってくれるのではなくて、「私」が何かしなければならないということになり、最初は少し厳しいスタンスだと感じた。しかし、災害復興にせよ、安心・安全なまちづくりにせよ、一人一人が強くなり、きちんとやらなければ実現は難しい。安全・安心という観点では、例えば自治会に入っていなかったら助けてもらえないという捉え方をすれば違和感があったが、よく考えると、こういう計画の中で、無責任に社会はこうしなければいけないなどと言ってしまうところに、厳しさも感じながらもかえって妥当なのではないかと思い直したところである。

第四章第二節の人間性を回復できるというところについては、何か大変な

目に私が遭ったとしても、一人きりで頑張るだけではなく、周りの助けも受けながら回復できるのだというようなニュアンスがもう少しあっても良い。ここでは、個人主義的傾向に抗うということと、「私たち京都市民」を主語とすることのバランスをとり、どのように上手くまとめるのかという点が難しい課題である。

宗田会長

コミュニティ防災とよくいうが、コミュニティが自分を守ってくれるのではなくて、自分がそのコミュニティを支え、守る側に立とうとすることによって、コミュニティの一員たり得るような、自立性こそ、いわゆる人間性を恢復することにもつながるということだと思う。

それでは、続いて藤野委員の御意見を伺いたい。

藤野委員

既に皆さんがおっしゃっている通り、骨子案の構成は極めてよく練られており、素晴らしいと考える。また記載内容についても、とりわけ自然を客体化しないという自然観そのものに私自身、深く共鳴している。

ただ、この内容を概観したとき、特に哲学分野などでは顕著だが、学問の世界が男性中心に発達してきたのだということを改めて強く感じた。鈴鹿委員も指摘されていたが、子ども、さらに広くはケアの観点が欠けている印象を受けたからである。人は生まれてから死ぬまで、常に誰かのケアを必要とし、一人では絶対に生きていけない。また、ケアは受けるだけでなく、授けるものでもある。とりわけ子どもはそうで、親や周囲の人の世話になって成長していく。ケアは人間の基本的な営みであり、日々の生活だと思うが、現在の骨子案からはその点があまり見えてこない。つまり、様々な立場の人たちが読むものだと考えたとき、高尚な世界だけではなく、もっと日常に落とし込んだ視点も入れられたら良いのではないかということである。

西洋二元論というが、ジェンダーの観点から言うと、近代の権力構造によって、女性が担ってきた領域、つまりケアなどが不可視されてきたことから、むしろ一元的な状態になっていたとも言える。SDGsは、そうした近代の権力構造によって不可視化されていたものを可視化するという大きな意義を持ってきたと思うので、私自身は重要な取組だと考えている。ここでも、これまで不可視化されがちであったケアの観点を明示的に盛り込んでいただきたいと願っている。

野村特別委員

ぐうの音も出ない。人文学の研究者の端くれとして、男性、30代、剣道家、アメリカの大学院というバックグラウンドについて自覚的だったつもりだが、文章にそういったものが滲み出ていることを、こうも平場で教えていただけるのは、本当に役得というか、人生を考え直したいと思う。皆さまも、ぜひ忌憚

のない御意見をいただきたい。御指摘はごもっともで、お恥ずかしい。本当に顔が赤くなっているが、勉強になる。感謝申し上げます。

宗田会長

フラットな関係で、どのようなことでも言えるような議論展開を続けていきたい。よく考えられた御発言、鋭い御指摘を頂いた。

もう少し福祉の話を続けたい。この後は高屋委員、福富委員の順で御意見を伺っていきたい。

高屋委員

私はベタな京都人間なので、そのベタなところも含めて起草いただければと思う。第四章第三節に、「職業、学事、祭事、稽古事、名もなき関わりに基づく共同体」と書いてあるが、この辺は、私がいつも目指している町内会などの延長だと思う。福祉の世界は特にそうだが、人口減少が進む中で支える側の高齢化が進行し、そうした人が一生懸命やっているのが現実なので、支え、盛り上げようと頑張っている市民の姿を、未来のビジョンに落とし込んでいただけたらありがたい。福祉の世界では高齢化が本当にひしひしと感じられるので、人口減少と高齢化について、ビジョンに落とし込むことを考えていただきたいと思う。

福富委員

福祉の立場から見ても、個人の暮らしが崩れていくのは、その個人のせいではなく、環境との関わり合いの中で相対的に起こっているものであるため、骨子案にはとても納得するところである。例えば、第四章第四節の市民のこれからというところで、主体性という話があったが、まさにそうで、歴史や過去の様々なものの積み重ねから今の暮らしがあるけれども、これから先、一人一人が周りのために何かをすることで次の社会が形成されていくのだとしたら、「私」という主体それぞれに責任があるということを示すことが必要だろうと感じる。

また第四章第三節で「構造的暴力」に言及していただいていることは大変良いと感じている。やはり、暮らしづらさの背景には、社会構造の問題がある。ソーシャルワークの考え方では、社会構造自体に如何にアプローチしていくかが重要だといわれている。干渉と予防に尽力していった先、すなわち構造的なゆがみや、暴力が徐々になくなっていった先に安心があるのだと思う。一般の方に向けて福祉の話をするときには、「ふくし」と平仮名で書いて、「ふくし」の「ふ」は普通の「ふ」、「く」は暮らしの「く」、「し」は幸せの「し」という、普通に暮らせることが実は幸せで、それが私たちの、福祉の目指しているものなのだと伝える。その普通は、その人や職業等によって様々な違いがあると思うが、まずそういうところから排除されずに、その人としてきちんと暮らしていけることを目指すという辺りまで書いていただけるとありがたい。

また、先ほどからの議論にある人口減少、高齢化の問題などは、サイズの大きい問題だが、例えば障害のある人や子どもなど、福祉の観点から見ればいろいろある。ただ、これはビジョンであり、個別具体的に書き込む趣旨のものではないとのことであるので、少し悩ましい。現行の基本構想では障害のある方などのことも書かれていたので、今後どこまで書いていくのか検討いただきたいと思う。

宗田会長

文化や歴史、過去との一体性などという京都らしさが表現しやすいが、今おっしゃった福祉、あるいはコミュニティの、京都の地域に暮らしている方たちの京都らしさというものが一体となって京都らしさがあるのだという論点も非常に重要な点なので、そういった視点からも新しい公の在り方を追求できればと思う。

福富委員

一点追加で申し述べたい。先ほどケアの話があったが、ケアというと一般的にはケアする側が、される側に対して施すようなイメージだが、実はケアしている側が逆に頂くこともたくさんある。例えば、ケアする中で癒やされるなどという相互作用的なものがあるので、ケアする、されるという関係性の中に一体的な何かが起こっているのだということだ。

宗田会長

安心・安全に関して、続いて松井委員から御意見を伺いたい。新型コロナウイルスが発見されてから5年になるということが先日報道されていたが、コロナ禍の大変な5年間に安心・安全を守る最前線で活躍されたお立場からいかがだろうか。

松井委員

本日、皆様の議論を聞きながら勉強させていただいている。長期ビジョンを様々な事柄を含めて1万字程度で書くのは難しいことだと思う。新型コロナウイルス感染症に対峙してきた経験から申し上げますと、おそらく今後も大きな波がやってくる。感染症に限らず、人口減少や少子高齢化という具体的な問題は、目前に、そして急激なスピードで襲ってくる。次なる感染症の危機は来るかどうか明言できないが、人口減少社会、少子高齢社会は確実に訪れる。そうした中、こうしたビジョンに具体的に何をしていくかということを書き込むのは難しく、先ほどレジリエンスという話があったが、やはり、その場その場で、どうやって柔軟に対応していくのかということを考えながら、自分たちの責任を果たしていく、役割を果たしていくということが重要である。そうしたとき、基本的なビジョンがあれば、自分たちが何かやらなければいけない時に、目指す方向が明確であることで、将来何か大きな問題が起きた際にも、それを見返

すことによって、自らの行動の規範とすることができるのだと考えている。例えばイギリスには、「ゆりかごから墓場まで」という、一言でどのような国なのかということが理解できるような言葉があるが、京都にも、他所とは違う何かを一言で表現できるものがあるのではないだろうか。

また別の話だが、先日、伝統文化を守っていらっしゃる京都の若い職人さんの話を聞く機会があった。その方は、伝統の技術を継承しているだけではなく、一つの製品が出来上がるまでのプロセスで、様々なものの関わりや自然との共生にも思いを巡らされていた。伝統文化といわれている多くのものを手掛ける方々は、おそらく、それだけでは生活していけないが、伝統を守らなければという想いで一生懸命活動されて、そこから更に多様に派生して活動を広げていらっしゃる。それを見たとき、伝統文化の継承とは、技術だけではなく、理念や理想の継承なのだと感じた。つまり、京都で守っていかなければならないものは、最初の議論に立ち戻るが、そういった、理念や理想ということなのかと思う次第である。

宗田会長

まさに、その理念と、今言い換えられたが、その部分がこのビジョンに書くべきことだということは、一致していると思う。

次は濱崎委員、いかがか。

濱崎委員

大変面白く、また勇気付けられる思いで読ませていただいた。京都的な視座、非二元論的という点が話題になってきたと思うが、そういったところを京都の役割として世界に伝えていくというのは非常に意味のあることだと思う。また、これを伝えることによって、私たち自身も、あるべきスタンスや考え方を、具体的に、あるいは理想として持てることは、非常に素晴らしいと思った。とはいえ、どのようにそれを伝えるのかということは、本当に大変な作業だと思う。

また、文字数が非常に少ないので難しいと思うが、これまでの京都の成り立ちを語る中で、そうした非二元論的な視座がいかにして育まれてきたのだということを示すことができれば、ビジョン全体の中で納得できる形になり、大変良いと思う。それこそ理想論だが、現在・過去・未来がつながって「だから京都なのだ」というような、全体がぐるっとつながっていくような形にできると良いと思った。

それから、第三章第二節において、現在の京都の姿をいろいろ記載いただいている中で、都市の景観の話もあった。現行基本構想以降、京町家に関する取組が活発にあったので、そういったことの話もあれば良い。

先ほども日常の中の文化という話があったが、住まいが取り壊されていっているという否定的な面だけではなく、その課題に取り組もうとしている人たちもたくさん現れたのは意味のあること。町家という暮らしの空間・時間の中から生まれた文化が、いわゆる「伝統文化」になっている。そういう意味で、

この数十年で生活空間にどのような変化があり、どのような取組をみんなで一生懸命に頑張ってきたのか、また、これから私たちの暮らしは、どのように紡いでいくのかということを考えることに大きな意味がある。少し高尚に見えつつある「文化」との接点が、暮らしの中にあり、現代においては、京都にいるからこそ体感できている部分がある。だからこそ、京都の人たちは、「文化」と日常との間をつなぎ、まだ次代へとつなぐ接点としての役割があるのだ。

このようなことを、言葉でうまく言うというのは、それこそ二元論になってしまうのかもしれないが、しかし、二元論を乗り越えて、腹落ちできる提言になれば良い。腹落ちできる空間があるというようなことが言えれば良いと思う。

宗田会長

松井委員発言の伝統工芸の方もそうで、今の町家の話もそうだが、町家があるから京都は偉大なのではなく、今生きている人が、そこにある伝統工芸を大切に、これまでを大切にする気持ち、スタンス、哲学、理念があるから、町家の住民もそれをつないでいこう、さらにそれを紡いでいこうという姿勢がある。それが、京都らしいということだろう。

もちろん反省することも含め、これまでに対してどう向き合うかというところに、京都らしさがきつとあって、それがいわゆる学事、祭事、稽古事等を続ける、京都人らしい生き方になるのかもしれない。

では、プラー委員、よろしくお願いします。

プラー委員

すばらしい構成だと感じた。特に第四章に関しては、これからの京都をどうしていくのかということが、かなり網羅的に書かれている。皆さんがおっしゃっているように、京都人のプライドや、京都人の誇りなどを前面に出している。伝統を守っていくことに加え、その人間的なつながりをとても大切にされるという、第四章第三節の中に書かれていることは、とても良いことだ。

外国人にとっても、大好きな京都。京都が大好きな外国人は多く、その人たちがどうしたら暮らしやすくなるのかということ、入れていただければと思った。

私のような、外国籍で長く日本に住んでいる人は、「国民」や「市民」という言葉に、自分が入れているのか、入れられていないのかが気になっている。「国民」ということになると、少し違和感があるが、「市民」という言葉になると、自分も含まれていると感じる。現行基本構想冊子の6ページに書かれている「全ての人」という部分について、二行に渡り（約72文字）記載があり、市民という概念を丁寧に、特に国籍や、民族や、生まれなどは、すごく丁寧に書かれていると感じている。

また、榊田委員もおっしゃっていたような、分かりやすい日本語で書いていただければと思う。ただ、分かりやすい日本語にこだわってしまうと、もっと

難しい文章になってしまうため、長期ビジョン本文はある程度分かりやすい内容で、それ以外に、誰が読んでももっと意味が分かりやすいものを別紙で作る。さらに、自動翻訳などで読む人の言語に合わせて多言語化することで、もっと分かりやすくなる。自分の理解できる言葉で読めることは、とても重要だと思う。

宗田会長

25年前に策定の京都市基本構想の6ページを御紹介いただいた。この当時も私は審議会委員だったが、「国籍や民族、生まれや生い立ちに関係なく、全ての人が自分の居場所を」という議論について熱く語っていた。とはいうものの、今思えば京都の地域社会は現在とは状況が異なり、まだまだ国際化していなかった。

一方で、この第三章第一節、「前四半世紀における世界の動き」において、D E I（Diversity, Equity & Inclusion）という世界の潮流を挙げていただいているが、先ほど堀場委員もおっしゃったように、S D G sをはじめ、決して世界がD E Iを言っているわけではなく、実は昔から京都の中で、多様な人々がどう共に生きるかという観点は、大きな課題とされていた。いろいろな御苦勞をされた方たち、もちろん、内なる多様性の問題もあったから、それを踏まえたうえで、京都はこの課題に自らどういう取組をし、どういうことを解決してきたかということも少し踏まえる必要がある。

我々が気付かなければいけないのは、このD E Iはアメリカ、ヨーロッパではそれぞれ大変苦しんでいるテーマである。いわゆる多文化共生などと、割とのんびりと言っている時代ではなくなっている。そして、世界が激動している中で、京都のような地域社会が、このD E Iをどう考えるかということも大きな課題であると御指摘いただいたと思っている。この25年間で、この課題についてだいぶ進んできたが、同時に、インバウンドが急増している現状において、インバウンドに対してどう対応するか、どう京都に合わせてもらうのかという議論もあり、かなり重要な御指摘である。

次は、田中委員、いかがか。

田中委員

過去、現在、未来が、すごく分かりやすく書かれていると思った。私は京都出身ではないので、過去、現在の情報量が少ないが、「みんなで作ってきたまちなのだ、後から住んでいる自分たちも、そこの一員になるのだ」というようなところは、理解しやすいと思った。この内容が冊子になったときに、どう使われていくか想像しながら内容を読んだ。例えば、京都出身で京都に住んでいる中高生が、総合の時間で長期ビジョンの第四章「京都市のこれから」の部分を読んだ時に、学生たちがこれからどういうことができるだろうかと考えられるきっかけになる。また、京都のことをいいなと思っている人が長期ビジョンを読めば、自分がここに住んだり、京都に関わったりしたときに、ワクワ

クするような自分の未来があるなと思えるものになると、すごく良いのではないかと思った。

第四章「京都市のこれから」について、若い人は特に活字離れと言われている中で、全体的にキーワードが多いなと感じた。反対に、キーワードとして少し少ないと感じたのは、先ほども意見にあったような子育てや教育、学びの多様化のようなところだ。学びや教育が今後どのようなようになっていくのかということは、ぜひ盛り込んでほしいと思う。

また、産業の発展や経済の部分についても、書かれていることが少ないと感じたため、その部分も御検討いただきたい。

第四章第三節の冒頭で、「デジタル化が人類社会における個人主義的傾向を強化していく中で～」という記載に対し少し疑問を感じた。デジタル化が個人主義的傾向を強化していると言い切るのは少し違うのではないか。デジタル化も一つの要因ではあるだろうが、時代の流れや、核家族化、単身世帯の増加などの要因もあるため、それだけではないと思う。記載方法について御検討いただきたい。

宗田会長

確かに、デジタル化をどう捉えるかということは、いろいろ考えるべき時期にきている。新聞を読まなくなっている、活字を読まなくなっていると御発言があったが、若い人とどうコミュニケーションするかということも考える必要があるだろう。このことは、長期ビジョンを、どう市民にお伝えしていくかという問題とも関わることだと思っている。

では、阪部委員、ここで一言お願いします。

阪部委員

日々、ダイバーシティやLGBTQの問題に向き合っている立場の視点で見ると、第四章第三節の「自他の生をともに肯定し尊重し合えるまち」において言及されているが、西洋的なDEIやこれまでの流れを踏まえたうえで、ダイバーシティという言葉やそういう項目として扱わずに、京都らしさ的なところで書いていこうという方針をお示しいただいたことに大変共感できる。

日々、様々なLGBTQの課題に関わっている中で感じるのは、西洋的な価値観を特に前面に押し出し過ぎていて、社会が分断していたりするところが、京都らしさとあまり相いれない点。そういう意味で、骨子案に記載されている「人の在り方を尊重し合いながら」のような表現は、すごく優しくて良いと思った。

ただ一方で、可視化という意味では、もう少し踏み込んだ表現も何らか必要かと思っており、その辺りのバランスが難しいと思っている。

宗田会長

しばらく前に、クリエイティブエコノミーやクリエイティブシティという

議論において、L G B T Qに対して寛容になった社会が経済的に発展していくのだという説があった。京都は、ある意味で寛容な社会を何とか維持してきた部分がある。だから多様な新しい技術や産業が発展してきたという説があり、これからの都市のクリエイティビティをどう維持するかということとも密接に関係すると感じている。

では、貫名委員、よろしくお願いします。

貫名委員

ここまで御議論いただいた総論、構造の部分、あらゆる指摘について非常に賛同する。各論的な話を申し上げると、骨子案は全四章構成だが、今回の審議で一番大事なものは第四章と考えている。

各節のイントロというか、背景情報の部分で、果たしてそれが事実であるかが気になっている。例えば、第四章第一節「自然への畏敬と感謝を抱けるまち」の部分だ。「京都市においては、自然を開発や消費の対象として客体化してきた過去数世紀～」と記載があるが、果たしてそうなのだろうか。また、「非西洋圏の興隆」の記載は、いわゆる西洋は自然と対峙していて、東洋は自然と調和しているというような議論をベースにしているのかと思うが、実際、アジア各国、あるいはアフリカの地域において、自然との関係はなかなかひどいものがあるのが現状だ。一方で、京都はどうなのか。過去数世紀、本当にそれほど客体化して、切り離してきたかというのは疑問だ。実際に、お祭り文化関係等で、京都の自然を生かして、いろいろ取り組まれている方々もおられる。これに限らず、先ほどのデジタル化の議論もそうだが、本当に事実かどうか。特にイントロであるため、エピソードベースではなく、エビデンスベースで本当にそれが事実なのか、あるいは証拠があるのかという点を、少しだけ気にしたほうが良いのではないかな。

それに関連した視点のヒントとして、京野菜を例に挙げる。京都らしさの特徴として京野菜などと総称で捉えられるが、様々な視点がぎっくりとひとまとめになってしまっている。我々京都の人間は、「すぐき」と聞くと北のほう、「九条ネギ」であれば九条、「桂ウリ」は桂を思い浮かべる。そこに地域性や、身体性や、人間性があるということで、どこに自身の視点を置くかで、全く物の見え方が異なる。昨今、京都像を語る時に、洛中の中心部に行くほど、非常に京都的であるという語られ方をしがちだが、洛外といわれる地域に、様々な京都らしさのエッセンスがあるのではないかなと思う。京都像をどこから見るとによって、全体の見え方が変わってくるのではないかな。

野村特別委員

ごもっともである。3ページの第四章第一節の冒頭のイントロの点については、文意の確認だけさせていただきたい。「京都市においては、過去数世紀の姿勢そのものを問うていく」という文章で問うていくのは、京都市の姿勢ではなく、世界的な姿勢を意図していた。京都はそのような客体化の色合いが薄か

ったという趣旨で書いたものであり、こちらは、私の文章が誤解を与えてしまった。失礼した。

その上で、私も一応は査読論文を出版した経験もあるので、後段のご指摘もごもっともだ。「二元論とは何だ」という話は何百年も学術的に議論されてきた主題である。他方で、これも少し誤謬があるが、学術的に厳密に書こうとすると、多くの人にとって文意が極めて取りにくい、読んでも分からないものになり得る。この辺りは塩梅も含めて検討したい。翻って、御指摘は本当にごもっとも。感謝申し上げます。

宗田会長

今の御発言の中にもあったように、自然とどう対峙するのか、どう関係を持つのかという大きなポイントを見直す機会が来ている。根底にある、西洋と日本という捉え方もおかしい、アフリカなどを見なさいという意見もあった。世界観自体も、東洋、西洋、日本と西洋という捉え方や自然と人間という捉え方をするのではなく、もう少し幅広く物事を捉えていくことも重要かつ現代的な視点である。25年の間に、世界観が変わるかもしれない。

いわゆる北と南。東西だけではなく、北と南の関係も変わってほしいと思う。その時に交流するような何か規範的なものがあるとすれば、それは京都から生まれるかもしれないという可能性を秘めていると思う。

都心の文化だけが尊いわけではなく、その京都の洛外の周辺の自然や農業などにも京都らしさがある。「田舎に京あり、京に田舎あり」という言い方をするが、そういうことをうまく御発言いただいております、大変興味深い。

では、原委員、お願いします。

原委員

京都らしさ、京都の良さというか、住んでいるところの良さは、やはり住みやすさや働きやすさがあるこそだと思う。先ほどの御発言にもあったように、私は昭和の人間のため、やはりコミュニティというか、いろいろな固まりが大事だと思う。デジタル化の進展においては、良い面と悪い面があり、闇バイトの話がある一方で、婚活アプリを活用し結婚につながるなど、良い面もある。デジタル化もどう活用していくということが重要だと思う。第四章第三節でデジタル化について言及があるが、京都市はきちんと対応していくということも、文言でアピールされていると思っている。

また、万人が読むものであるため、お年寄りの方、働いている方、学生の方、誰もが読みやすく内容が理解できる文章であってほしい。長期ビジョン本文の執筆は大変な作業と思うが、それ以外に抜粋版なども用意して、パッと見て分かりやすいものを作っていただければと思う。

宗田会長

働き方の問題は、現在急速に見直されようとしており、京都のまちに暮らす

ことが、働き方を充実させるための大きな一歩になるかもしれないという京都らしさも追求していきたいと思う。

では、曾我副会長、お願いします。

曾我副会長

全体の構成は、過去から現在があって未来があるという流れで構成されているため、長期ビジョンにおける将来像が、最後のほうにならないと登場してこない。きちんと理解しようという人は、前から順を追って内容を理解するだろうが、未来の部分がなかなか出てこないなと思って、そこまで至らない人もいるのではないかとも思う。

それと少し関係するが、未来があって、その未来に到達するために、現在からどうやっていったらいいのかという点が、骨子案では見えにくい。それは、第四章の未来が、こうなるだろうという予想の話と、こうしようという目標の話が、混ざった形で書かれているからである。そのため、このような目標を目指す、現状はこうであるから、目標との差を埋めるためにはこうしなければいけないというのが、見えにくい形になっているように思う。

第三章第二節では、行政なども含めた様々な政策領域的な現状について記載されているが、第四章で記載の目指す目標に、何が足りていなくて、どうしたらいいのかというようなことが見えにくい。つまり、過去から現在、未来と書かれると、何となく自然とこのように流れていって目標に到達していくような気がするが、本当にそのようなことはあるだろうか。目標と予想を分けて、かつ、現在を認識した上で、その差をどうやって埋めるのかということを考えたほうが良いのではないか。最終的な文章の書き方は、いろいろ考えられると思うが、一度そこを理解してから作成したほうが良いと思ったのが、1点目だ。

次に2点目である。25年前にはスマホもなく、中国から来た製品などもそれほどなかった。本当にグローバル化、デジタル化が圧倒的に進んだと思う。そのうえで、これからの25年を考えた時に、骨子案の内容は、対応すべきことに十分対応しているのだろうか。例えば、生成AIは明らかに大きな分野になるのは間違いなく、そういう状況において、教育を今のような在り方で継続したとき、25年後に仕事はあるのだろうかと思う。技術の進歩について、少し後ろ向きに記載されている気がする。しかし、技術の進歩は止めようもないし、止めるべきでもないだろうし、それに対応することが必要ではないだろうか。また、経済もデジタル化を生かさなかったら成長しない。京都のまちの問題に、大学卒業後に京都から流出してしまう問題があるが、生成AI等の技術は、大学や、学問を学んできた人間が、きちんとそれを生かせる仕事だ。そのため、デジタル化などについて、あまりネガティブなことばかりを書くよりは、そういうものが経済の中心になってくることを生かしつつ、それにどのように対応するのかを記載することが必要だ。

もちろん、他方で問題はたくさんあり、一般の市民にとって大事なものは、福祉と経済と教育だと思う。そこに対する将来像として、予想がこのようにあ

って、それに対して、このように対応するということを書かなければいけないと思う。福祉分野などでは、デジタル化などの進展により、どんな病気になりやすいかなどの生命的なリスクをはじめとする情報が、全部丸裸になっていく世界が来ると思う。そういった時代に、どのような社会保障を用意していくのかという問題は、結構大きいと思う。

デジタル化が個人主義的傾向を強くしているというよりは、個別化された情報が取られていく時代。例えば、通販会社などが、この人はこのようなものを食べている、頼んでいるなどの生活習慣に係る情報を取ってしまった。もし、その情報を使って保険などを設計するとなると、この人はこれぐらい生活習慣病にかかるリスクがあるということを計算し、その計算に基づいた保険料の設定などができるという世界も考えられる。そういった個別化された情報が取られていく時代に対して、どのように対応するのかという問題は大きいのではないかと思います。

最後に3点目である。私は政治学者だが、政治に関する記載が全くないと思う。現行基本構想の中には、担い手を考えるなどの記載が結構あった。そのため、現行基本構想は行政だけではなくて、市民と一緒にやるのだということが強く出ていたと思う。それが定着したこともあり、第四章第四節は割と短めに書かれていると思う。しかし、政治、行政の側が抱えている問題として特に大きいと思うのは、今も既に現れている分断化や分極化が、今後も、さらに強まることだ。京都において、そういうものと無縁であり続けられるなどということはない。今でも、実際には、潜在的にあると思う。どこの国であっても、分極化はないなどという話はないわけで、どこにでも潜在的にあり得る。政治に関することとして、政党や、政党の取組をここに記載するわけではない。人々がどういう形で公共的なものに対して関わっていくのか、その時に分極化してしまうのか、それともまとまっていけるのかという問題について、記載があっても良いのかと思う。

宗田会長

最後の政治に関する発言に関連して、松井市長の新京都戦略骨子に記載の「新しい公共の推進」という部分が、一つの政治的なスタンスであり、それを長期ビジョンにどう書くか。過去20年、30年にわたって、京都市は市民参加推進を随分図ってきた。100人委員会をつくるなど、市民と一体となって取組をしてきた中で、今度は新しい公共という形で発展していくのだろうけれども、今、重要な点は、この分断化する社会である。そこを、まさに松井市長がどうお考えになるか。我々の市民社会は、そこまで強くはないのかもしれないという御指摘だと思う。

そして、前半の御発言と関連し、不易流行があり、急速に変わっていく部分と、反面、これだけデジタル化が進んでも、家族や親子など、変わらないものもある。もちろん、地域社会もそうだ。その中で、我々の守り続けるものこそ、守り続けたいと思うものこそ京都らしさであるかもしれないということは、

答えはあるが抽象的過ぎるため、もう少しきちんと書くべきだという議論だと思う。最後に、安保副会長からお願いする。

安保副会長

様々な御意見をいただき、大変勉強になった。いろいろ漠然と思っていたことが、議論を通じてつながってきた。

京都市民が、これは自分たちの未来を書かれていると思えるものである必要があると思う。昔でいう洛中の方や、それから洛外に住む方、社会で活動している方も、これは自分のことをいわれていると思えるようなものだ。

骨子案の記載のあるように、構造的に社会の周辺に張り付けられてしまっている人たちも多い。京都といえども、そういう社会の構造的な問題については、どうしても影響を受けざるを得ない。そういう方々にとっても、自分たちも市民であって、長期ビジョンの価値観と一緒に共有できる幅広いものであってほしい。

御意見にもあったが、骨子案に少し硬いところがある。京都はすごく厳しく、きちんとした面もあるが、奥深い、寛容な深さがある、それで受け入れてくれているところがあり、安心していられるところもある。そのため、長期ビジョンは、すべての方が自分のことをいわれていて、自分の理想にできるのだというような、少し柔らかく、それから寛容なものであってほしい。

また、先ほど分断という言葉も出たが、そうではなく、建設的な対話や活動などで一緒につくっていけるのだというところを、もう少し膨らませていただければと思う。

それから、主体的参加。どうしても大人しかイメージできないが、子どもも、教育されるだけの受け身ではなく、子どもは子どもの生活について主体的に参加できる、まだ社会で主流ではない若い人も参加できるなど、そういう京都の多層性の記載もあってほしい。そういうことができれば、私たちのビジョンという形で捉えることができ、子どもたちや若い人と話す時など、いろいろな場で活用できるものになるのではないかと思った。

宗田会長

長期ビジョンは様々な場面で活用していただきたいものであることは確かだ。

野村特別委員

委員の皆様方の御意見はしっかり受け止めて反映を検討したいと思うが、2点、事務局とも相談していきたい点を見つけている。

1点目が、皆様方から複数御指摘があったように、具体でどのように使われていくのか。これは、僕は、実は6月末か7月頭の時点で、事務局の方とも議論をしていた。どのタイミングで、どういう媒体で広げていくのか。それがタブレットなのか、パソコンなのか、印刷された紙なのか、冊子なのか。何語

で書かれているのか。かつ、配られて、どれぐらいの時間をかけて読んでもらえるのか。

まさに原委員からもお話があったように、抜粋して、もっと分かりやすく、関心のあるところをもっと先に見てもらえるなどという設計があり得るであろうところ、書いて終わり、印刷して終わりではないと思うので、市民の皆様方に、広く、かつ、長く読んでいただけるようなものになるような設計は、相談していきたい。

2点目が、曾我先生の御指摘の、本当にこれも、ぐうの音も出ないというか、構成の話は検討したい。というのも、いまお出ししているものではこういう構成は採用していなかったが、現状がこうであって、こういうところに向かっていきたくて、その差分があるのだからこう頑張ろう、という構成でないと、気合表明で終わる。

他方で、市長のお話にもあったように、長期戦略を3年スパンで立てられる等もあるところ、前段で申し上げた、具体で、どのタイミングで、どのように使っていただけるのか、読んでいただけるのかということも踏まえて、抽象度や、後は今申し上げたような、ある種の課題解決型の構成構造そのものがベストなのかどうかも含めて、事務局の方々とも御相談したい。

総じて、僕自身も、委員の先生方から大変勉強させていただいている。本当に感謝申し上げる。引き続きよろしく願いしたい。

宗田会長

市民の皆さんとどう共有していくかという課題に関しては、市民フォーラムを開くなど、様々な場で市民の皆さんにお伝えしながら、御意見を伺うことになるだろうと思う。それに加え、委員の皆さんにも、商工会議所、経済同友会はじめ、大学などいろいろな場で、学生の方、事業者の方、福祉関係社の方にも共有していただく。我々審議会委員は決して自分の意見を言いに来ているだけではなく、様々な方たちの意見を代表しているため、フィードバックをしたうえで、委員の皆さんを通じて市民の皆さんに伝え、そしてまた御意見をいただく仕組みをもう少しつくっていくべきかと感じる。

振り返ってみると、世界文化自由都市宣言は今から46年前に制定されているが、改めて長期ビジョンを作る際にじっくりと読んだ。しかし、去年や一昨年はきちんと読んでいたかというところ、そこまでしっかりと読んでいない。折に触れて、きちんと、じっくり時間をかけて読んでいくものだ。伝統文化や町家などについて、この25年間取り組んできたからこそ、世界文化自由都市宣言の意味が分かってくるように、長期ビジョンが、今の段階でわかりにくいと多少思ったとしても、もう少し時間がたったとき、その局面を見たらわかってくる。

世界のことを結構意識するのが京都人の特質で、冒頭の発言でもあった京都府立医大では、「世界最先端の医療を府民へ」というスローガンを掲げている。世界最先端の知見を持ち寄って、京都の景観政策、都市計画、福祉政策などに

相当取り組んでいるので、まさに世界都市としての京都だろう。発言にあった世界歴史都市会議においても、そういう役割を持っているのだろうし、この議論も、市民の皆さんと一緒に深めていくことになると思う。

それでは、松井市長から、御発言いただきたい。

松井市長

各委員の皆さんに、それぞれ大変含蓄のある、あるいは非常にストレートなコメントをいただき、心から感謝を申し上げます。

野村特別委員を、執筆者、起草者として依頼するのは、京都市側の意向であるが、本日は野村特別委員に骨子案を提起していただき、非常に様々なコメントをいただいた。総じて構成について賛同の声が大きかった。そのことについて、本当に感謝申し上げます。

橋本龍太郎氏が総理だったときの行政改革会議で、行政改革の理念と目標という文書を書いたとき、京都大学の佐藤幸治先生と一緒に作成した。それを書かせてくれた当時の上司には大変感謝したが、一つ残念だったのは、行政改革会議では非常に賛同していただき、ほぼ文書についてコメントがなかったことだ。そのときの自分たちの合言葉は、「この理想に負けないような案を作ろう」だった。「佐藤先生、この理想に照らして、僕らが中途半端な案を作ったら、この文書と、あの中身は何だったのだと後世が我々を叱咤するような、そういう文書を作りたい」と言って、文書を作成したことを思い出す。

私も含む2050年までの歴代の市長、あるいは市役所が、さらに市民や、京都市に生きる全ての当事者、あるいは京都を愛する当事者が、こういう長期ビジョンを作ったのに、今の京都はどうしているのだと言われるような、ある意味で高い球を投げてほしいということを、私は、最初に野村特別委員に申し上げた。野村特別委員は、その当時の桑原武夫先生、梅原猛先生、あるいは鷲田先生に匹敵するような年齢には、まだ達しておられない。しかし、野村特別委員がこの文章を執筆したことに誇りを持てるような議論をここでしていただき、野村特別委員も、我々も含めて鍛えていただきたい。長期ビジョンが、2025年のこのとき京都はこういうことを考えていた、という参照ポイントとして、将来において、「この具体的な政策は、この精神に照らしておかしいではないか」、あるいは、「もっと頑張らなくてはいけないのではないか」といわれるようなものを執筆してほしいというのが、野村特別委員に対する正直な想いであり、それは、私自身にも降りかかってくることである。

野村特別委員から、「長期ビジョンを世界に発信したい。誰に向けてこれを発信するのか」という話があったが、世界に発信したいと考えている。野村特別委員から脱二元論的なことや、主語がというような説明があったのは、野村特別委員にお願いした「英語で書いたときにも文意が通るような文章にしたい」といった制約要因にもよるかもしれない。

2035年や2040年、2050年になった時に、現行基本構想がそうであるように、長期ビジョンを読んでもくれる人の数は減っていくと思う。その

ため、長期ビジョンといっても、どうしても今に引きつけられるのは当然だと思うが、野村特別委員には、陳腐化しない、本質的な言葉を使っていたきたいということを依頼した。本来であればもう少しかみ砕いて書かれるはずのものが、概念的な言葉がそのまま入っていたことは、そういった依頼や、また骨子の字数の問題によるかもしれない。「あまり外来語は使いたくない。できるだけ和言葉を使いたい」と、野村特別委員は当初から発言されていたので、野村特別委員の意に反して若干そういう概念が残っていたとしたら、それは、お願いした私の責任かもしれない。

ただ、私は政治家で、社会の在り方、京都というまちの在り方を考えてほしい。その全体を構成する部品として、企業の在り方、政治や行政組織の在り方がある。総体として、このまちがどうあるべきか、ということを書いていたきたい。先ほど曾我副会長から御発言があった、政治や行政の在り方である。

宗田会長に御発言いただいたように、新しい公共について、書いてほしいことではあるが、自分としては古い。人々の関わり、人と人とのつながり、社会の在り方、その中での行政の在り方を、やはり書かなければならないだろう。

私の、執筆者としての経験を伝えたのは、本日の議論がうらやましいと思うからだ。錚々たるメンバーから、最終的な共同責任者として、真剣なコメントをしていただいたのは素晴らしく、それを聞かせていただいた私もいろいろな多くの気づきを得ることができた。

今のタイミングで自分が使うべき言葉。長期ビジョンで使うべき言葉は、それとイコールでいいのか。イコールでいい部分も、もしかしたらあるのではないか。私は、「ぬか床」や「外湯」などの言葉をよく用いる。そういうことを言わないと伝わらないからだ。例えば、新京都戦略を読んでも、そういう言葉の嵐だ。しかし、長期ビジョンでそうなってしまうと、逆に2050年までの長期構想に堪えないのではないかという思いもあって、私がそういう言葉をここで申し上げるのは控えてきた。

ただ、2025年の京都の人の心を動かさないで、2050年の京都の人の心を動かせるのかということもある。もう少し言葉をかみ砕いて、いろいろな立場の人々にわかるような、心に染み通るような文章にしなければいけない。野村特別委員には、梅原先生や桑原先生、あるいは鷺田先生のような、次の京都の社会を考える哲学者になっていただきたい。しかし、同時に、我々も期待するだけではなく、このような言葉を使ってみても良いのではないかというようなことは、委員の皆さま方からも、執筆者にどんどんインプットしていただきたい。また、ここの構成はやはりミスリードだというようなことはお伝えいただきたい。

皆さんの貴重なお時間を頂いたことに、心から感謝申し上げます。次回以降もよろしくお願いする。

宗田会長

審議会委員の皆さんも、野村特別委員の文書に積極的に関わっていくことで、

文書を通じて自分の参画の様子が何か残っている形になるのが理想だ。

最後に一つ。世界文化自由都市宣言は、冒頭に「都市は理想を必要とする」という文章から始まっているが、世界が理想を必要としている時代だ。戦後約80年となり、世界は理想を持っていると思っていたが、今の世界はとてもそうはいえない状況になっており、25年後に京都から、何か理想のようなものが発信できる状況になっていたらすばらしい。そのため、世界の理想を何か提言できるような、過大な希望かもしれないが、それぐらいの京都になれば良いと思っている。

では、事務局に進行をお返しする。

司会（都市経営戦略監）

事務局としても、皆様から頂いた御意見を踏まえ、構成をどうするのか、市民の方にどのように伝えていくようにするのかということについて、皆さんに御提案できるようにしていきたい。

（２）事務連絡

司会（都市経営戦略監）

それでは、以上をもって第3回京都市総合計画審議会を閉会する。

3 閉会

（以上）